

東日本大震災から8年を迎えるにあたって

東北地方を中心に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、まもなく8年が経とうとしています。

今、あらためまして、この震災で亡くなられた方々に、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。また、各地域で復興にご尽力されている方々に深く敬意を表します。

生団連は「国民の生活・生命を守る」ことを使命とし、東日本大震災をきっかけに設立された産業界と消費者団体とが結束する日本で初めての団体です。「大災害への備え」については、設立当初より災害対策委員会を設置し、「大震災への備え事例集」の発行や、WEB ページ「ソナエラボ」で防災の情報を発信してまいりました。

昨年度からは、生団連会員による情報収集と支援のプラットフォーム「生団連災害情報ネットワーク」の構築を重点課題に掲げ、前述の委員会の機能をさらに強化するかたちで「新・災害対策委員会」を発足させ、被災地・被災者の実態や自治体の支援体制、災害時の食、各企業での災害対応などについて調査してまいりました。今年度はその調査の一環として、事務局員が福島県相馬市といわき市を訪れ、あの大震災からの復興状況の視察も行いました。実際に訪れたからこそ分かる大変多くの気づきがありました。上記「生団連災害情報ネットワーク」の整備に向け、新・災害対策委員メンバーや会員間でこうした現場の情報を共有しております。

今後も、一般社団法人 Smart Survival Project(SSPJ)や特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン(PWJ)など、実際に災害支援に取り組む団体を含む 550 を超える団体や企業が加盟する生団連は、そのネットワークを活かし、災害時の「情報収集の体制」や「支援の仕組み（生団連サプライ）」づくりをさらに強力で推進してまいります。

生団連は被災地の一日も早い完全復興を祈念しております。

《添付資料》

- 生団連会報 Vol.26 福島県現地調査レポート

生団連 HP からご覧いただけます <https://www.seidanren.jp/index.php/kouhou>

《リンク》以下のページもどうぞご参照いただき、防災等にお役立てください。

- 大震災への備え事例集 https://www.seidanren.jp/pdf/shinsaisonae_b4.pdf
- ソナエラボ WEB ページ <https://www.seidanren.jp/sonaelabo/>
- 物資支援スキーム（スマートサプライ） <https://smart-supply.org/>
- 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン(PWJ) <https://peace-winds.org/> 以上

平成 31 年 3 月 8 日

国民生活産業・消費者団体連合会（生団連）

一般社団法人 Smart Survival Project (SSPJ) ※

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン (PWJ)

※ SSPJ の災害支援活動は、今般新規に設立された一般社団法人 Smart Supply Vision に継承されました。
同法人も新年度より生団連に加盟の予定です。

福島県現地調査レポート

『生団連災害情報ネットワーク』構築に取り組む事務局員が、福島県相馬市といわき市を訪れ、東日本大震災から7年経った被災地の復興状況を視察しました。

“平時からのネットワークが重要”

立谷 秀清 福島県相馬市長(全国市長会会長)



災害支援は「義理と人情」。震災時は「絆」と呼んでいましたが、要するに「しがらみ」が大事です。被災地・被災者と支援者との関係の前に、まずは横のネットワークづくりが大切です。

例えば大阪北部地震では、被災した各市の市長が災害対応に不慣れなところもあったため、災害対応経験のある他地域の市長がアドバイスをを行いました。それにより的確で迅速な対応ができました。



▲立谷市長(写真中央)



▲相馬井戸端長屋

“災害だけでなく、高齢者への対応も” 相馬井戸端長屋(災害公営住宅)

- 元々高齢者の孤独死対策として構想していたが、被災した高齢者の孤独死防止のため整備
- 「井戸端」のイメージで、「入居者は昼食を一緒にとる」「洗濯機は共有にする」というルールをつくる等、孤独死させない工夫がある
- 昼食はNPOが配食しており、ボランティア活動に対応するためのスペースもある

“震災を機に備蓄の強化を” 相馬市防災備蓄倉庫『相馬兵糧蔵』

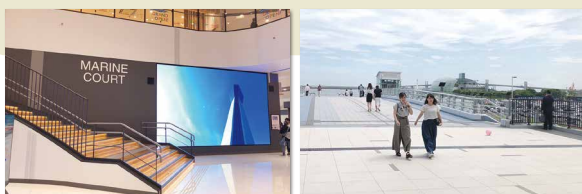
- 「米びつ」の発想から、1万人3日分の備蓄とキッチンカー、臨時ヘリポートを完備。支援物資が届くまでの3日間を念頭に備蓄。日照のある時間帯は、屋上のソーラー発電で米の貯蔵庫の空調を稼働させている
- 可動式の棚にパレットで収納。東日本大震災の経験から、パレット保管が一番効率よいと判断。食糧だけでなく、毛布やストーブの備蓄もある
- 感謝の意を込めて倉庫内には、災害協定を提携している市、震災の際に寄付・物資支援のあった市、職員派遣をした市を掲示している



▲備蓄倉庫内部の様子

相馬共同火力発電株式会社 新地発電所

- 東日本大震災の当日には、新地発電所のタービン室に約1,100名が避難した
- 中央制御室内はかなりの部分が自動化されている(視察当日は6名が制御室内で作業に当たっていた)



▲発災時にはサインージ画面も災害情報に切り替わる

イオンモールいわき小名浜

- 「防災モール」としてオープン。海側のペディストリアンデッキから店内、更には屋上駐車場へ避難可能
- 非常用電源や貯水槽は、津波到達予測の高さよりも高い2階以上に設置し、イベントなどを行う「イオンホール」に繋がっており、有事の際もコンセントと水道が利用可能

【事務局所感】 今回の視察では、以下の3点について再認識いたしました。

- ① 平時からのネットワーク(生団連であれば会員同士の繋がり)の重要性
 - ② 災害からの復興を考える際には、地域の抱える他の問題(例えば高齢化)に対する視点も大切
 - ③ 生団連の会員においても、それぞれの事業の特性を活かしながら防災・災害対応に関する取り組みを進めていること
- 今後、以上の点を理解しつつ、「生団連災害情報ネットワーク」の構築を進めてまいります。